

【調査論文】

ヘルン文庫ロシア文学関連書籍調査報告

武田 昭文

はじめに

本調査の目的は、富山大学附属図書館所蔵「ヘルン文庫」に収められたロシアとロシア文学に関する書籍の情報を整理して紹介することである。調査にあたっては、『ヘルン（小泉八雲）文庫目録 改訂版（稿）』（富山大学附属図書館、1999）〔以下『目録』と略記〕を利用して原本との照合を行い、『目録』の記載に不足または誤りがある場合はこれを補足・修正した。また一般読者の便宜を図り、各書目について、新たに日本語で書誌情報を記載し、合わせてハーンの読みあと（書き込み、アンカットの状況等）に関する情報を注記した。

本調査報告はⅢ章構成をとる。Ⅰ章は、『目録』からロシアとロシア文学に関する書目を抜き出し、上記のような補足・修正を加えて、日本語の書誌情報と注を付したリストを掲げる。Ⅱ章は、本調査を通して気づいた「ハーンとロシア文学のかかわり」を考えるための視点を覚書風にまとめて解説とする。Ⅲ章は、Ⅱ章とのつながりでハーンの芸術観を考える上で重要と思われる、「ハーンによるトルストイ『芸術とはなにか』の線引き箇所」の仏露和テキスト対照を《附録》として付すものとする。

Ⅰ. ヘルン文庫ロシア文学関連書籍リスト

本リストの作成にあたって採った方針は次のようなものである。

- ・該当する書目を『目録』での記載内容に基づいて示す。
- ・記載する事項は、全蔵書に通し番号として付された書架番号、著作者名、タイトル、翻訳者名、発行地、発行年等とし、必要な場合はコンテンツを含める。
- ・*印のついた書架番号は、ハーンが来日時にアメリカに置いてきた書目で、これらの本はハーンの死後、1914年に日本の小泉家に返却された。
- ・『目録』の記載内容は斜体文字で表示する。
- ・斜体以外の記載はすべて筆者による補足・修正の箇所であり、さらに二重下線で強調する。
- ・修正の箇所は、見え消し線を引き、横に修正を併記し、おなじく二重下線で強調する。
- ・『目録』の表記には、特にコンマ、ピリオドの用法に不統一が見られるが、「第〇版」の〇の数字の後のピリオドはすべて削除することで統一する。（例：2. édition → 2 édition）
- ・各書目について、新たに日本語で書誌情報（著作者名、タイトル、翻訳者名、発行地、発行年等）を記載する。

- ・日本語の書誌情報の作成にあたっては、該当する書目が中・短篇集の場合、収録作品のタイトルをすべて和訳してロシア語の原題とともに示す。その際、該当する作品にすでに邦訳がある場合は、その邦題と合わせるように努める。
- ・今回新しく確認された書き込みやアンカット箇所については、おなじく日本語の注の部分に記し、太字下線で強調する。
- ・※印の記載は本リストの作成者による補注である。

ENGLISH BOOKS X. Periodicals [S-122頁]

[1262-1265] *The Russo-Japanese war : fully illustrated. No.1-4. – Tokyo: Kinkodo-Shoseki and Maruzen, 1904. - p.1-142 + p.143-282 + p.283-424 + p.425-566 ; 27 cm.*

『日露戦争』（全4冊）、東京：金港堂書籍、1904年。

FRENCH BOOKS I. Literature - 2. f. Russian Literature [S-163～S-165頁]

Dostoévskii , Fëdor Mikhaïrovich. (4冊)

* [1688] *Le crime et le châtimeut / Th. Dostoïevsky ; traduit du russe par Victor Rerély. Tome I - II. - 2 édition. - Paris : E. Plon , 1885. - 2 vols. in 1. 334 p. + 308 p. ; 19 cm.*

『罪と罰』、V. ルルレー訳、パリ：プロン書店、1885年。

[1689] *Les étapes de la folie / Th. Dostoïevsky ; traduit du russe par E. Halperine-Kaminsky. - Paris : E. Perrin , 1892. - 264 p. ; 20. cm.*

『狂気の階梯』、E. アルペリヌーカミンスキー訳、パリ：ペラン書店、1892年。

収録作品：表題作は「ネートチカ・ネズワーノワ (Негочка Незванова)」を改題して縮訳したもの、「弱い心 (Слабое сердце)」

アンカット本 (乱丁あり)。「狂気の階梯」1-149頁中、アンカット42-103、122-127頁。「弱い心」151-264頁中、アンカット202-255頁。

* [1690] *Humiiliés et offensés / Th. Dostoïevsky ; traduit du russe par Ed. Humbert. - Paris : E. Plon , 1884. - 360 p. ; 19 cm.*

『虐げられた人びと』、E. アンベール訳、パリ：プロン書店、1884年。

裏表紙見返しに、サイン (Lafcadio Hearn 1885 New Orleans) あり。

* [1691] *Souvenirs de la maison des morts / Th. Dostoïevsky ; traduit du russe par M. Neyroud. Préface par Le Vte E. Melchior de Vogüé. 3 édition - Paris : E. Plon , ~~1888-?~~ [1886 ?] - 357 p. ; 19 cm.*

『死の家の記録』、M. ネイルー訳、パリ：プロン書店、1886?年。

Gogol' , Nikoïai V. (2冊)

* [1692] *Les âmes mortes / Nicolas Gogol ; roman traduit du russe par Ernest Charrière. Tome I - II. -*

Paris : Hachette , 1885. - 2 vols. in 1, 336 p. + 357 p. ; 19 cm.

『死せる魂』、E. シャリエール訳、パリ：アシェット書店、1885年。

* [1693] *Tarass Boulba / Nicolas Gogol ; roman traduit du russe par Louis Viardot. - Paris : Hachette , 1882. - 215 p. ; 19 cm.*

『タラス・ブーリバ』、L. ヴィアルドー訳、パリ：アシェット書店、1882年。

※翻訳者のルイ・ヴィアルドー（1800-1883）は、トゥルゲーネフの生涯の愛人で歌手のポーリーヌ・ヴィアルドー（1821-1910）の夫。

Gor'kii , Maksim. (2冊)

[1694] *Caïn et Artème : nouveaux récits de la vie des vagabonds / Maxime Gorki; traduction de S. M. Persky. - Paris : Perrin , 1902. - 280 p. ; 20 cm.*

『カインとアルチョーム』、短篇集、S. M. ペルスキー訳、パリ：ペラン書店、1902年。

収録作品：「カインとアルチョーム (Каин и Артём)」「詐欺師 (Приходимец)」「銀の綴じ金 (Дело с застёжкой)」「筏の上 (На плотях)」「不穏な本 (О беспоконной книге)」「秋の一夜 (Однажды осенью)」「二人の泥棒 (Дружки)」「仲間たち (Товарищи)」

アンカット本。全部カット。

[1695] *Dans la steppe : récits de la vie des vagabonds / Maxime Gorki; traduction et préface par S. M. Persky. - Paris : Perrin , 1902. - 271 p. ; 20 cm.*

『曠野にて』、短篇集、S. M. ペルスキー訳、パリ：ペラン書店、1902年。

収録作品：「曠野にて (В степи)」「アルヒーブ爺さんとリョーニカ (Дед Архип и Лёнька)」「鷹の歌 (Песня о Соколе)」「エメリヤン・ピリヤーイ (Емельян Пиляй)」「汗とその息子 (Хан и его сын)」「ギザギザ (Зазубрина)」「マカール・チュードラ (Макар Чудра)」「二十六人とひとり (Двадцать шесть и одна)」「イゼルギリ婆さん (Старуха Изергиль)」

アンカット本。全部カット。

Merezhkovskii , Dmitrii S. (1冊)

[1696] *La résurrection des Dieux : Léonard de Vinci : roman / Dmitri Merejkowsky; traduction et préface de S. M. Persky. - Paris : Perrin , 1902. - 492 p. ; 20 cm.*

『神々の復活 レオナルド・ダ・ヴィンチ』、S. M. ペルスキー訳、パリ：ペラン書店。1902年。

アンカット本。全部カット。

Tolstoi , Lef Nikolaevich. (6冊)

* [1697] *Les Cosaques ; Souvenirs de Sébastopol / Comte Léon Tolstoi ; traduction du russe. - 2 édition. - Paris : Hachette , 1886. - 310 p. ; 19 cm.*

『コサック／セヴァストーポリ物語』、翻訳者の記載なし、パリ：アシェット書店、1886年。

* [1698] -[1700] *La guerre et la paix : roman historique / Comte Léon Tolstoi ; traduit avec l'autorisation de l'auteur par une Russe. Tome I - III. - Paris : Hachette , ~~1888~~ 1885. - 3 vols. 462 p.+ 387 p.+ 410 p. ; 19 cm.*

Contents : - Tome I : Avant Tilsitt , 1805-1807. Tome II : L'invasion , 1807-1812. Tome III : Borodino - Les Français à Moscou ; éEpilogue , 1812-1820.

『戦争と平和』（全3巻）、作者監修によるロシア女性訳、パリ：アシェット書店、1885年。
第1巻のはじめ150頁ほど、単語への印・線引き、および行間の×印が、28箇所（7、37、59、64、79、80、82、88、91、92、93、94、95、98、103、104、125、127、130、131、132、133、134、137、138、142、143、147の各頁）あり。

※翻訳者の「ロシア女性」は、イリーナ・イワーノヴナ・パスケーヴィチ（1835-1924）。名門貴族のヴォロンツォーフ＝ダーシコフ家出身で、有名軍人を輩出したパスケーヴィチ家に嫁いだ。舅のイワン・フョードロヴィチ・パスケーヴィチ（1782-1856）は、ナポレオン戦争に参加し、後に陸軍元帥となった。

[1701] *Premiers souvenirs ; Maître et serviteur / Léon Tolstoi ; traduit par E. Gourévich et G. Frappier. - Paris : Ernest Flammarion , ~~1887~~ [1895 ?] - 184 p. ; 19 cm.*

『最初の思い出／主人と下男』、E. グレーヴィチ、G. フラピエ訳、パリ：フラマリオン書店、1895?年。

アンカット本。「主人と下男」21-181頁中、アンカット97-175頁。

※「最初の思い出」は、トルストイの『90巻全集』（1928-1958）では、「私の人生（Моя жизнь）」のタイトルで第23巻に収録されている。

[1702] *Ou'est-ce que l'art? / Comte Léon Tolstoi ; traduit du russe et précédé d'une introduction par Teodor de Wyzewa. - Paris : Perrin , 1898. 270 p. ; 20 cm.*

『芸術とはなにか』、T. ド・ヴィゼワ訳、パリ：ペラン書店、1898年。

アンカット本。全部カット。裏表紙に、数字の書き込み（122、227、229）あり。

122頁、行頭に1つの段落を区切った2つの線引き。

124頁、行頭に短い線引きの印。

227頁、行末に10行ほどにわたる縦の線引き。

229頁、行末に短い線引きの印。同頁の下に曲線の線引き。

※122、124頁は、本書の第9章に、227、229頁は第16章に該当するが、ロシア語の原著では、それぞれ第10章と第17章に該当する。これは翻訳者のヴィゼワが、原著の第1章を「序文」に、第20章を「結論」に改変したために章立てにズレが生じているからである。

[1703] *Résurrection : roman / Comte Léon Tolstoi ; traduit par T. de Wyzewa. - nouvelle édition , complète en un volume. - Paris : Perrin , 1900. 561 p. ; 19 cm.*

『復活』、T. ド・ヴィゼワ訳、パリ：ペラン書店、1900年。

アンカット本。全561頁中、アンカット10-23、42-87、106-107、122-127、138-447頁。第3篇448頁以降最後の頁までカット。

[1704] *La sonate à Kreutzer / Comte Léon Tolstoi ; traduit par E. Halpérine-Kaminsky. - Paris : Perrin , 1888-?* 1895. - 249 p. ; 18 cm.

『クロイツェル・ソナタ』、E. アルペリヌーカミンスキー訳、パリ：ペラン書店、1895年。

アンカット本。全249頁中、アンカット164-165、170-175、186-207頁。

Turgenev , Ivan S. (4冊)

* [1705] *Etranges histoires / J. Tourguéneff ; Etrange histoire, Le roi Lear de la steppe, Toc... toc... toc... , L'abandonnée. / J. Tourguéneff - Paris : J. Hetzel, 1888-?* 1873. - 326 p. ; 18 cm.

『不思議な話』、中短篇集、翻訳者の記載なし、パリ：エツツェル書店、1873年。

収録作品：「不思議な話 (Странная история)」「荒野のリア王 (Степной король Лир)」「コツ…コツ…コツ! (Стук... стук... стук!)」「不幸な女 (Несчастливая)」

* [1706] *Mémoires d'un Seigneur Russe , ou Tableau de la situation actuelle des nobles et des paysans dans les provinces Russes / J. Tourguéneff Ivan Tourghenieff ; traduit du russe par Ernest Charrière. - Paris : Hachette , 1854. - 404 p. ; 18 cm.*

『獵人日記』、短篇集、E. シャリエール訳、パリ：アシェット書店、1854年。

表表紙見開きに、サイン (LHearn 1881) あり。

* [1707] *Nouvelles Moscovites / J. Tourguéneff ; traduction par P. Mérimée Merimée et l'Auteur. - 4 édition. - Paris : J. Hetzel , 1888-?* 1880. - 336 p. ; 18 cm.

『モスクワ通信』、中短篇集、P. メリメと作者の分担訳、パリ：エツツェル書店、1880年。

収録作品：「アーシャ (Ася)」「ユダヤ人 (Жид)」「ペトウシコフ (Петушков)」「犬 (Собака)」「旅団長 (Бригадир)」「エルグノフ中尉の話 (История лейтенанта Ергунова)」「まぼろし (Призраки)」

※このうち「ユダヤ人」「ペトウシコフ」「犬」「まぼろし」がメリメ訳。

「アーシャ」「旅団長」「エルグノフ中尉の話」が作者トゥルゲーネフの訳。

* [1708] *Les reliques vivantes / J. Tourguéneff ; traduction par P. Mérimée. 2 édition. - Paris : J. Hetzel , 1888-?* [187-?] - 282 p. ; 18 cm.

『生ける屍』、中短篇集、翻訳者の記載なし、パリ：エツツェル書店、1877年。

収録作品：「生ける屍 (Живые мощи)」「時計 (Часы)」「音がする! (Стучит!)」「プーニンとバブーリン (Пунин и Бабурин)」「仲間が寄こした (Наши послали!)」

目次の「時計」と「プーニンとバブーリン」の横に×印の書き込みあり。

FRENCH BOOKS III. History and geography (including ethnography) - 2. e. Europe [S-185頁]

* [1923] Russes & Allemands / Victor Tissot. - 2 édition. - Paris : E. Dentu, 1881. - 336 p. ; 18 cm.

V. ティソー『ロシア人とドイツ人』、パリ：ダンテュ書店、1881年。

裏表紙見返しに、数字の書き込み (206) あり。

206頁、行頭に数行にわたる縦の線引き。

II. 解説 ラファディオ・ハーンとロシア文学のかかわり

1. 富山大学附属図書館所蔵「ヘルン文庫」に収められたロシアとロシア文学に関する書籍は全24冊で、このうち金港堂書籍発行の英語雑誌 *The Russo-Japanese war: fully illustrated. No.1-4.*を除いた残りの20冊はすべてフランス語書籍である。その内訳は、文学19冊、地誌1冊で、作家別に見ると、トルストイ6冊、ドストエフスキー4冊、トゥルゲーネフ4冊、ゴーゴリ2冊、ゴースキー2冊、メレジコフスキー1冊となり、これに V. ティソーの地誌『ロシア人とドイツ人』が加わる¹。興味深いことに、チャーホフの本はなく、またトルストイでも『アンナ・カレーニナ』はない。

この数は、他の英仏独の文学に関するハーン蔵書数と比べると僅かなものであるが、一方で、イタリアやスペイン、また北欧や東欧の文学に関する蔵書数と比べると——イタリア文学は（ダンテを除いて）仏訳で2冊、スペイン文学は仏訳2冊と英訳1冊²、北欧と東欧の文学は（これも中世のエッダやサガなどを除いて）英仏の訳を合わせて3冊³である——それなりに揃っているとみることもできる。

2. 「ヘルン文庫」のロシア文学関連書籍の顔ぶれを見ていると、一見万遍ないようで、しかし或る偏りのあるコレクションの在りようが面白い。例えば、ゴースキーはあるのにチャーホフがないことはすでに指摘したが、そういえばプーシキンもなくレールモントフもない。また蔵書のあるトルストイやドストエフスキーについても、当然あってよさそうな本が欠けていたり、逆に思いがけない本が入っていたりと、意外性がある⁴。

¹ なお、本稿ではロングフェロー編『世界詩歌アンソロジー 全31巻』 Longfellow, Henry W., ed. *Poems of Places: An Anthology in 31 Volumes, Boston, 1876-1879.* (『目録』書架番号 [424-459]) 所収の第20巻「ロシア編」については考察の対象としない。同書におけるロシア詩の紹介については、別の機会に論じることとしたい。

² イタリア文学では、ダヌンツィオの『死の勝利』とレオパルディの『詩集』、スペイン文学では、カンポアモールの『フアナの恋』とエレディアの『作品集』(同書架番号 [1709-1712])、フアン・バレーラの『プティパ・ヒメネス』(同書架番号 [361])。但しスペイン文学に関しては、このほかに文学史の本が3冊所蔵されている。

³ 北欧文学では、イプセンの『戯曲集』、東欧文学では、シェンケヴィチの『北方十字軍の騎士たち』とペターフィの『騎士ジャン』(同書架番号 [345] [358-359] [2003])。

⁴ 前者の例として、トルストイでは『アンナ・カレーニナ』、ドストエフスキーでは『白痴』や『カラマーゾフの兄弟』などが挙げられ、後者の例としては、トルストイでは「最初の思い出」のよう

こうした或る偏向は、ハーン自身がその紹介に携わった「19世紀後半の西欧におけるロシア文学の〈発見〉」の在りようにかかわり、またその上でのハーンのロシアとロシア文学に対する関心の在りようにかかわっている。

3. まず、「19世紀後半の西欧におけるロシア文学の〈発見〉」という問題から。

なぜ、ハーンのロシア文学に関する蔵書はすべて仏訳本であるのか？ それはこの時代に、フランスで他のどの西欧諸国よりもさかんにロシア文学の翻訳が行われていたからである。その翻訳の質についても、ハーンは後に東大で行った講義録のなかで、「フランス語の翻訳は多くの点で英語よりはるかに優れている」（「トルストイの『復活』について」⁵⁾）と述べている。このフランスを中心とする「西欧におけるロシア文学の受容」については、すでに研究がかなり進んでいる⁶⁾ので、ここではその始まりについてのみ押さえておこう。

一般に、フランスそして西欧におけるロシア文学ブームの火つけ役となったのは、1886年に刊行されたヴォギュエの『ロシア小説』であるとされる。が正確に言うと、ヴォギュエは、同書のもとになる論文を、すでに1879年から『両世界評論』や『新評論』などの雑誌に発表しはじめていた。それとともに、ロシア文学の翻訳は、1880年代前半から続々と現れていたものであり、そうした事情はハーンのロシア文学関連の蔵書の発行年を見るとよくわかる。そしてハーンは、ちょうどそのころニューオーリンズにいて、同地の新聞に西欧文学の紹介記事を書き、恐らくは上記のヴォギュエの論文等を下敷きにして⁷⁾、ロシア文学とそのフランスへの移入について報告していたのである。（「国外におけるロシア文学」、「怖い小説一篇」、「トルストイの説く「知恵の空しさ」」——これらの論説はいずれも1885年の執筆で、後に

な小品、ドストエフスキーでは「ネートチカ・ネズワーノワ」（その縮訳版）のようなかなりマイナーな作品が挙げられる。

⁵⁾ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第9巻』（恒文社、1988年）、326頁。

⁶⁾ 日本語で読める基本文献として次のような研究と翻訳がある。

E. M. ド・ヴォギュエ「『ロシア小説』序文」川端香男里訳、『世界批評大系4 小説と現実』（筑摩書房、1975年）、324-351頁。

川端香男里「ヴォギュエの『ロシア小説』をめぐって」、『ロシア・西欧・日本』（朝日出版社、1976年）、556-564頁。

新谷敬三郎「日本におけるロシア文学」、『ドストエフスキイと日本文学』（海燕書房、1976年）、158-198頁。

『比較文学年誌』第24号別冊（早稲田大学比較文学研究室、1988年）[西欧でのドストエフスキーの翻訳について特集]

このほか、欧米とロシアにおける基本文献としては次のような研究が挙げられる。

Tolstoi in English 1878-1929, NY: The New York Public Library, 1929.

V. Boutchik, *Bibliographie des oeuvres littéraires russes traduites en français: Tourguénev, Dostoevski, Léon Tolstoi*, Paris: Messages, 1949.

Художественные произведения Л. Н. Толстого в переводах на иностранные языки, М.: Издательство всесоюзной книжной палаты, 1961.

⁷⁾ ハーンのロシア文学論のどこまでがフランスの雑誌論文の要約であり、どこからがハーン独自の見解であるかを明らかにするには、なおヴォギュエの論文等との綿密な照合を必要とする。

『東西文学評論』に収録される。)

このように、ハーンのロシア文学理解は、フランスにおけるそのブームを情報源としており、それゆえの鋭い比較文学的考察がもたらされた一方で、同時に、それゆえの或る偏りのあるものとなった。というのも、ヴォギュエの論文では、何よりもトゥルゲーネフ以降の、ドストエフスキーとトルストイを代表格とする人間心理を深く掘り下げた作品に関心が注がれ、プーシキンやゴーゴリの扱いは小さく、チェーホフに至ってはまだ注目もされていなかったからである。

4. ニューオーリンズ時代のハーンのロシア文学に対する見方をいくつか抜き出してみよう。

『東西文学評論』の巻頭に置かれた論説「理想主義の将来」で、ハーンは己れのロシア文学観をかなりはっきりと語っている。「イギリス民族とドイツ民族の理想主義は、さし当たって、これ以上発達する力を喪失し——みずからを枯渇させてしまったように見える。これに反して、新しい理想主義がもう一つ別の方角から——とはいえ、やはり北方からだが——すなわち、ロシアから！ 出現しつつある⁸。」「現在の諸徴候からすれば、理想主義と詩の新しい流派は、ロシアの影響によって起こり、その流派が帰属することになる未来の偉大な時代に十分にふさわしいものとなるであろう。[中略]ロシアの文芸に関する最大の驚異は、それが一方で理想主義の革新を約束しつつ、しかもかつて成就されることのなかった最も強力なリアリズム作品のいくつかを、下品に陥ることなく、世界に提供したということである⁹。」

このような手放しともいえる評価は、当時、ゾラ流の自然主義の席卷を苦々しく思っていたハーンが、彼の求める理想主義に応える力をロシア文学に見出して注目していたことを物語っている。

では、その力とはどのようなものであったか？ ハーンは、1880年代のパリの文学趣味に現れた一大反動（つまりロシア文学ブーム）を伝える論説「国外におけるロシア文学」で、その魅力を、ついこの間まで「猖獗を極めていた」自然主義と対比して、次のように述べている。「ロシア小説に見られる最も顕著な諸特徴のうちの一つは、その赤裸々な単純さである。」「もうひとつ、ロシアの恋愛小説に見られる長所は、それが純潔であるという点だ。」そしてハーンは、ロシア作家の物語が示すのは、「念の入った記述」でも「混み入った粉飾」でもなく、また「新しい筋を考え出そうとする苦心」でもなくて、いつも「絶対的な誠実と真理」だと指摘する¹⁰。

こうしたハーンのロシア文学観において興味深いのは、一つは、彼が常に比較文学的な観

⁸ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第5巻』(恒文社、1988年)、18頁。

⁹ 前掲書、19頁。

¹⁰ 前掲書、152頁。但し部分的に、小泉八雲『東西文学評論』三宅幾三郎、十一谷義三郎共訳(聚芳閣出版、1926年)の訳文を参照した。

点に立って、フランス文学やイギリス文学との比較を通して、ロシア文学の特徴とその西欧文学における意義を考察している点だ。この点において、ハーンは根っからの比較文学者であった。その上で、さらに興味深いのは、ハーンがロシア文学との出会いを、単に比較文学的な考察にとどめず、彼自身が待ち望んでいた新たな理想主義の文学の先触れとして、いわば彼自身の「理想の文学」と重ねて、或る熱をこめて語っていることである。

論説「トルストイの説く「知恵の空しさ」」には、露仏英の心理小説を比較した次のような一節がある。「心理小説ということになると、ロシアの小説家の向かうところ敵無し、と言っても誤りない。——これに反して、フランスの小説は、原則的に性的関係をめぐる諸問題および諸局相を殊更に取り扱うことになっている。また、イギリスの小説は、人生の大原則として、とりわけて「義務」の問題に論及することになっている¹¹。」

言い得て妙な評言だが、これに続く文章が重要である。そこでハーンは、おおよそ次のように述べている。「フランスの小説の型も、イギリスの小説の型も、今世紀の病であり経験の乏しい学生の恐怖であるところの、純粹に知的な煩悶を取り扱おうとはしない」、「割合に進歩した国では、そうしたことは、暗黙のうちに、哲学者や科学者の手に委ねられることになっている」、「しかしロシアでは知力の発酵が極めて清新で力強く、人心が極端な厭世主義とか神秘主義の傾向を特に帯びているために、新傾向の小説も、知的な難問を研究して解明することにその技を尽くしているのだ」と¹²。

このように読むと、ハーンがロシア文学に見出した力と希望とは、西欧文学から久しく失われた小説の総合性であったかと思われてくる。「進歩した国」では、もはや文学の守備範囲ではないとみなされていた、哲学や科学の問題をも貪欲に取り込んで、現代人の「知的な煩悶と難問」を解明しようとする総合小説。この「解」は、長篇よりも短篇やルポを好んだようにみえるハーンの嗜好からすると、一見意外に感じられる。しかし、総合的作品が決まって長いとは限らない。重要なのは総合の契機であり意志である。そしてハーンにとって、「あるがままの生」を描く自然主義の全体性ではなく、「あるべき生」にむかって理想（思想、イデー）を投企するロシア文学の総合性が、己れの理想主義にかなう清新な現象として、ポスト自然主義の〈世紀末〉が始まる文学状況において、極めて好ましく映っていたことは確かである。

5. さて、1890年の来日以降、ハーンのロシア文学熱は（致しかたないことながら）徐々に冷めていったと思われる。それも当然とすべきだろう、彼の前には、マルティニーク島での体験に続いて、今あらたに、フランスなどを中心とする西欧的価値観を相対化するエキゾチックな体験に満ちた、極東の未知の群島での生活が開けていたのだから。

¹¹ 前掲書、161頁。

¹² 前掲書、161頁。部分的に、聚芳閣発行の『東西文学評論』の訳文を参照した。

そんななかでも注目すべきは、決して数は多くなくとも、彼がドストエフスキーやトルストイ、また流行のゴーリキーやメレジコフスキーの本を買い求めつづけていることである。そしてハーンにおけるロシアとロシア文学との接点は、やがて一人の作家の作品と思想に集中していったようにみえる。それが、トルストイである。

6. ハーンがロシア文学について書いた論説は、まとまったものとしては5篇あり、そのうちの3篇がトルストイを取り上げている。さらにそのうちの2篇は、来日後に講義録として講じられたものである（「トルストイの芸術論」、「トルストイの『復活』について」¹³）。

19世紀末から20世紀初めにかけて、トルストイは、いわゆる「トルストイ主義／運動」の世界的影響力をもつ思想家として注目を集めており、ハーンのトルストイに対する関心も、そうした時代の思潮と多分に重なる部分があっただろう。しかしその上で、ハーンのトルストイに関する文章をよく読むと、そこにはやはり彼独自の眼差しというべきものが窺われる。それは、トルストイの東洋思想への関心に対する注目と、また彼の芸術論へのヴィヴィッドな反応に何よりも現れている。

論説「トルストイの説く「知恵の空しさ」」は、『アンナ・カレニナ』の「べつべつの評者によってなされた同書に対する精緻克明なる批評文二篇」¹⁴をもとにした紹介となっているが、内容は『懺悔』を取り上げている¹⁵。面白いのは、ハーンがこの論説ですでに、トルストイの改心をブッダの覚りと比較して論じていることである¹⁶。ここからは、ハーンのなかでトルストイが初めから東洋と結びつけて受容されていたこと、そしてその彼のトルストイ理解において『懺悔』が重要な意味をもっていたこと¹⁷の二つが確認できる。

ハーンがこの文章を書いた1880年代に、トルストイはまだ本格的な東洋思想研究に乗り出していなかった。だが知られるように、その後トルストイは、ブッダ（釈迦牟尼）や孔子、そして老子を研究し、己れのキリスト教的価値観と「万教帰一」的な世界観との間で思想的格闘を行うようになる。ハーンはそうしたトルストイの思想的展開を期待し、直観的に予言していたと見ることも可能である。というのは、トルストイとハーンはともに、彼らの感じ

¹³ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第9巻』所収（恒文社、1988年）

¹⁴ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第5巻』、161頁。なお、この「二つの批評文」の同定と、ハーンの論説との読み合わせも今後の研究の課題としたい。

¹⁵ 同論説で引用されているトルストイの言葉、「われわれの蒙が啓かれて知的になればなるほど、かえって、われわれの人生の意味を理解しにくくなるのだ。われわれは、受苦および死という二重の出来事のうちに、ひとつの残酷なあざ笑いを見出すのみである。」は、『懺悔』の第10章にある言葉である。

¹⁶ もっともこの比較はハーンの独創ではない。彼は、「批評家のひとり」がトルストイの新しい信条の告白を、ブッダとパーリア賤民の妻との間に起こった有名な挿話と比較しているのに賛同する形で、釈迦の生涯を歌ったE. アーノルドの長篇詩『アジアの光』をたっぷりと引用している。

¹⁷ しかしハーンが『懺悔』の翻訳を読んでいたかどうかは不明である。同論説からは、恐らく彼は『懺悔』について書かれた文章を読んだが、『懺悔』そのものは読んでいなかったように感じられる。

とった西欧近代文明の危機を受けとめて、トルストイの自己否定とハーンの自己流謫とその在り方は違えながら、広く東洋の文明的遺産も視野に入れて研究することで、進んで二つの〈文明のはざま〉に身を置き、西欧近代の〈世紀の病〉を乗り越えようとした点において、互いに共鳴し合う問題意識をもっていたからだ。そして筆者の見るところ、このこと——つまり、ハーンのとルストイ理解が『懺悔』を重要な契機としており、二人がともに文明論的視座の下に「西欧近代の超克」をめざしていたことは、ハーンがトルストイの芸術論に深い理解を示せたことと直接につながっている。

ハーンはまず、トルストイの『芸術とはなにか』について、「あらゆる欠点にもかかわらず〔中略〕この本はまったく誠実であり、私心がない」¹⁸と述べる。「欠点」とは、例えばトルストイがシェイクスピアやダンテを否定していることを指すが、しかし彼は、そうした「誤り」をあげつらうことはせず、もっぱらトルストイが投げかける芸術の本質の問題に集中している。そして、ここで言う〈芸術〉が、トルストイとハーンがともに批判的問題意識をもっていた〈西欧近代の芸術〉を指すことは言うまでもない。

ハーンはこの講義録で、「真実の芸術はある階層のみにではなく、あらゆる人たちに訴えかけることができなければならない」、「民衆が美に無感覚であるというのは偏見だ」といったトルストイの言葉を深い共感をもって引用しているが、これは自身がニューオーリンズで最下層の生活を味わい、常に庶民に寄り添って、平易な言葉で著述を行ったハーンの体験的理解にもかなう主張であっただろう。また彼は、「われわれが芸術と呼んできたものは、もっぱら官能主義や肉欲に訴えかけるものばかり」で、民衆の健全な心を動かさないというトルストイの言葉をうけて、「残念ながら、トルストイはその点でまったく正しいと思う」と述べている。

このようにハーンが、当時、猛烈な批判を呼び起こしたトルストイの芸術論を、正しく〈西欧近代芸術批判〉の書と捉えて、彼自身の体験と著作活動にからめて冷静かつ肯定的に評価できたことは、極めて重要である。それは、トルストイの芸術論に対するハーンの批評が、ハーンその人の芸術観をも垣間見せているからだ。

ハーンはこの講義を、「私はトルストイがまったく正しいと信じているが、彼の原則を厳格に守っていたら、諸君に講義できなくなる。〔中略〕イギリス文学の数百の有名な本は、本来悪い本でありしたがって一冊も読んではならないと諸君に言わねばならなくなる。しかし、この私はといえば、まさにそれらの本の文学的な価値を諸君に指摘する目的で、雇われているのだ」と結んでいる。この言葉は自嘲のようで自嘲ではない。ハーンはトルストイのようにリゴリスチックではなかった。トルストイが一概に否定した「理解するには、かなり

¹⁸ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第9巻』、312-313頁。以下、同講義録からの引用はこの翻訳に拠る。

教育を受け、洗練されていなければならない」作品を擁護する言葉も、彼はもっていたはずである。そうしたハーンのトルストイの主張に反する近代芸術擁護の発言も、彼の著作のなかに探してみる。そしてその上で、トルストイの芸術論に対して彼が示した理解と、それとは相容れぬかのようにみえる芸術観とが、ハーンのなかでどのように共存していたかを考えること。

あえて予断すれば、そのように相反し、相容れぬかのようにみえる価値観を両方理解し、矛盾と葛藤を受け入れて〈はざま〉に立つことが、ハーンの文学的個性であった。その在りようを、思想と美学の問題として、彼の文学論に即して跡づけることは魅力的である。そして、このような問題を考える出発点になるという意味でも、ハーンのトルストイ論は、彼の文学観と芸術観のなかに重く位置づけて考察すべき対象であると思われる。

7. 最後に、今回の調査を通して得られた「発見」をひとつ紹介しよう。

本調査では、アンカット本のカットの状況を見ることで、ハーンが講義でも取り上げているトルストイの『復活』の読み方について大変面白い発見があった。ハーンは、アンカットの「あまり頁を切っていない」本に関しては、最初の方をしばらく読んで、それから真ん中へんの頁を少し切り、そして最後をまた切っていることが多いのだが、そうした拾い読みのしかたが、『復活』ではとても面白い頁の切り方になって現れていた。

ハーンは、この小説の初めの100頁ほどを、ほとんど気紛れのようにペンをナイフを入れて拾い読みしたあとで、第1篇の後半と第2篇をそっくり飛ばして、第3篇だけを通読しているのである。これをどう考えるべきか？ もしかするとハーンは、この小説のあらすじをすでに知っていたために、そのクライマックスがどのように描かれているか知りたくて、第3篇のみ一気に読了し、その勢いで講義に、学生たちに話しにいったのではないだろうか。思い描くと、楽しい情景である。

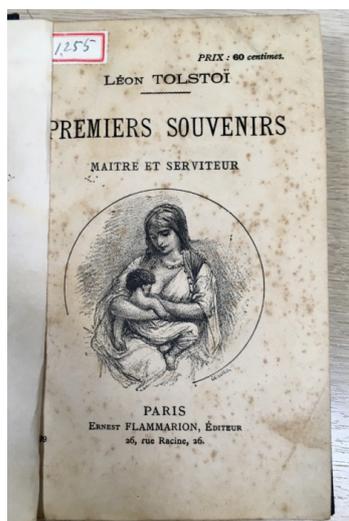
しかしまた、別の可能性もある。深い洞察に満ちた『復活』論をものしたハーンが、この小説を全部隈なく読まなかったとはにわかに信じがたい。英仏での『復活』の翻訳は、彼の読んだペラン書店刊の単行本が出るまえにすでに現れていた——仏訳は1899年に「エコール・ド・パリ」紙に掲載され、英訳は1899-1900年にロンドンで刊行されている。『復活』は、世界的な反響を呼んでいたから、ハーンは日本にいても誰か知人を通じて、その英仏での翻訳を見せてもらっていたかもしれない。

トルストイの『90巻全集』所収の『復活』の解説によれば¹⁹、「エコール・ド・パリ」紙の翻訳は、刑務所内での勤行を皮肉った箇所など、教会や国家権力を批判した部分が削除された不完全な版であった。だからもし、ハーンがこの翻訳を先に読んでいたとしたら、彼は

¹⁹ Л. Н. Толстой, *Полное собрание сочинений в 90 томах*, М.-Л.: Художественная литература, 1928-1958. (Kraus Reprint 1972) Том. 33, С.413.

まさにそうした部分の頁を（「気紛れに」ではなく）切って確認した上で、未読の後半を一気に読んで講義で話したという可能性もあるのである²⁰……

このように、「ヘルン文庫」はそのほんの一隅を調査するだけでも、ハーンとその時代をめぐる興味の尽きない情報を示唆し、想像を豊かに膨らませてくれる。この『復活』の例のほかにも、例えば「最初の思い出」のような、まったく有名な作品ではない、トルストイが自分の幼児期の記憶を記した覚書の翻訳を、ハーンがどのような関心から買い求めたのかなど、この本の表紙に描かれた母子像を見ていると、さまざまな想像が浮かんでくる。



（トルストイ作『最初の思い出』、パリ：フラマリオン書店、1895?年）

Ⅲ. 《附録》ハーンによるトルストイ『芸術とはなにか』の線引き箇所の仏露和テキスト対照

フランス語訳は、『芸術とはなにか』の雑誌初出時のテキスト（『哲学と心理学の諸問題』第40-41号、モスクワ、1897-1898年）を底本としているため、ロシア語原文の引用はこの初出テキストに拠った²¹。これに対して、河野与一の邦訳は、トルストイが雑誌版に加筆訂正を行った『ビリュコフ版全集』第19巻（1913）所収のテキストを底本とし、『クシネレフ版全集』第15巻（1898）とエルマー・モードの英訳本（1899）を参照したものであり、両テキストの間には、以下の引用箇所に関してごく僅かな語句の異同がある。

²⁰ このことを確かめるには、「エコール・ド・パリ」紙の『復活』の翻訳と、「ヘルン文庫」所蔵の『復活』の翻訳を照合し、特に、後者の前半で頁の切られた部分の内容がどのようなものであり、それが前者の翻訳で「削除」されていないかどうかを確認する必要がある。

²¹ «Вопросы философии и психологии», No. 40-41, Москва, 1897-1898. CC. 979-1027 (No. 40). CC. 1-137 (No. 41). 引用にあたっては、ロシアのインターネットサイト Портал «Родон» に公開されている資料を参照した。 <http://www.rodon.org/other/vfip.htm>（参照 2019-01-22）

① (フランス語訳、書架番号[1702] 122頁)

Dire qu'une œuvre d'art est bonne, et cependant incompréhensible à la majorité des hommes, c'est comme si l'on disait d'un certain aliment qu'il est bon, mais que la plupart des hommes doivent se garder d'en manger. La majorité des hommes peut ne pas aimer le fromage pourri ou le gibier faisandé, mets estimés par des hommes dont le goût est perverti ; mais le pain et les fruits ne sont bons que quand ils plaisent à la majorité des hommes. Et le cas est le même pour l'art. L'art perverti peut ne pas plaire à la majorité des hommes, mais le bon art doit forcément plaire à tout le monde.

(ロシア語原文)

[...] сказать, что произведение искусства хорошо, но непонятно, все равно, что сказать про какую-нибудь пищу, что она очень хороша, но люди не могут есть ее. Люди могут не любить гнилой сыр, протухлых рябчиков и т. п. кушаний, ценимых гастрономами с извращенным вкусом, но хлеб, плоды хороши только тогда, когда они нравятся людям. То же и с искусством: извращенное искусство может быть непонятно людям, но хорошее искусство всегда понятно всем. (*«Вопросы философии и психологии», No. 41, Москва, 1898. СС.45-46.*)

(日本語訳)

芸術の作品がいいけれどもわからない、と言うのは全く、何か或る食物について、これは非常にうまいけれども人に食べられない、と言うのと同じ事になる。普通の人は、変に凝った味覚を持つ食道楽の連中が珍重する、腐ったチーズやぷんと臭う雷鳥のような食物が嫌いだろう。しかしパンや果物は、普通の人の気に入るものならば、うまいと言える。芸術にしても同じことだ。変に凝った芸術は普通の人にはわからないだろう。しかし、いい芸術はいつでもすべての人にわかる。(河野与一訳『芸術とはなにか』、岩波文庫、1981年、第41刷。127-128頁)

② (フランス語訳、同124頁)

Et si une chanson japonaise ou un roman chinois me touchent moins qu'un Japonais ou un Chinois, ce n'est pas que je ne comprenne pas ces œuvres d'art, mais seulement que je connais des œuvres d'un art plus haut.

(ロシア語原文)

Если меня мало трогает песня японца и роман китайца, то не потому, что я не понимаю этих произведений, а потому, что я знаю и приучен к предметам искусства более высоким, а никак не потому, что это искусство выше меня. (*Там же. СС.47.*)

(日本語訳)

日本の唄や中国の小説が少ししか私を動かさないのは、そういう作品が私にわからないからではなくて、もっと高尚な芸術を私が知っていてそれに慣れているからであって、決してその芸術が私よりも高尚だからではない。(同書、129頁)

③ (フランス語訳、同227-229頁)

Chez les hommes qui n'ont pas été pervertis par les mensongères théories de notre société, chez les artisans et chez les enfants, la nature a mis une conception très définie de ce qui mérite d'être blâmé ou loué. Suivant l'instinct des gens du peuple et des enfants, l'éloge ne revient de droit que, ou bien à la force physique (Hercule, les héros, les conquérants), ou à la force morale (Çakya²² [Mouni, renonçant à la beauté et au pouvoir pour sauver les hommes, le Christ mourant sur la croix pour notre bien, les saints, les martyrs, etc.]). Ce sont là des notions d'une clarté parfaite. Les âmes simples et droites comprennent qu'il est impossible de ne pas respecter la force physique, puisqu'elle s'impose elle-même au respect ; et la force morale de l'homme qui travaille pour le bien, elles ne peuvent s'empêcher de la respecter aussi, se sentant entraînées vers elle par tout leur être intérieur. Et voici que ces âmes simples s'aperçoivent qu'en plus des hommes respectés pour leur force physique ou morale, il y a encore d'autres hommes plus respectés, plus admirés, plus récompensés que tous les héros de la force et du bien, et cela simplement parce qu'ils savent chanter, danser, ou écrire des vers. Elles voient que les chanteurs, les danseurs, les peintres, les hommes de lettres gagnent des millions, qu'on leur rend plus d'hommages qu'aux saints ; et ces âmes simples, — les enfants et les gens du peuple, — sentent le désarroi grandir en elles.

Lorsque, cinquante ans après la mort de Pouchkine, ses œuvres ont été répandues dans le peuple, et qu'un monument lui a été élevé à Moscou, j'ai reçu plus de dix lettres de paysans me demandant pourquoi on exaltait ce Pouchkine. Il y a quelques jours encore, un petit bourgeois de Saratof, — homme instruit d'ailleurs, — est venu à Moscou pour reprocher au clergé d'avoir approuvé l'érection d'un « monument » au sieur Pouchkine.

Et, en effet, qu'on se représente seulement la situation d'un homme du peuple qui lit dans son journal, ou qui entend dire que le clergé, le gouvernement, tous les hommes les meilleurs de la Russie élèvent avec enthousiasme un monument à un grand homme, à un bienfaiteur, à une gloire nationale, Pouchkine, dont jamais jusqu'alors il n'a entendu parler. De toute part on lui parle de Pouchkine ; et il suppose que, pour qu'on rende de tels hommages à cet homme, il faut donc qu'il ait accompli quelque chose d'extraordinaire, de très fort, ou de très bon. Il essaie donc de savoir qui était Pouchkine ; et en apprenant que Pouchkine n'était ni un héros ni même un général d'armée, mais simplement un écrivain, il en conclut que certainement Pouchkine a dû être un saint homme, un éducateur bienfaisant. Aussi se hâte-t-il de lire ou d'entendre lire sa vie et ses œuvres. Qu'on imagine donc son ahurissement en apprenant que Pouchkine a été un homme de mœurs plus que légères, qu'il est mort en duel, c'est-à-dire

²² 段落初めからここまで行末に縦の線引きがあり、2段落先に行末に短い線引きの印があつて、同頁の下に目印の曲線が引かれている。以下、線の切れている間にある文章は、各引用において[]に括って示すものとする。

tandis qu'il essayait de tuer un autre homme, et que tout son mérite consiste à avoir écrit des vers sur l'amour !]

(ロシア語原文)

Третье последствие извращения искусства — это та путаница, которую оно производит в понятиях детей и народа. У людей, не извращенных ложными теориями нашего общества, у рабочего народа, у детей существует очень определенное представление о том, за что можно почитать и восхвалять людей. И основанием восхваления и возвеличения людей по понятиям народа и детей может быть только или сила физическая: Геркулес, богатыри, завоеватели, или сила нравственная, духовная: Сакиа- [Муни, бросающий красавицу жену и царство, чтобы спасти людей, или Христос, идущий на крест за род человеческий, и все мученики и святые. И то и другое — понятно и народу, и детям. Они понимают, что физическую силу нельзя не уважать, потому что она заставляет уважать себя; нравственную же силу добра неиспорченный человек не может не уважать потому, что к ней влечет его все духовное существо его. И вот эти люди, дети и народ вдруг видят, что, кроме людей восхваляемых, почитаемых и вознаграждаемых за силу физическую и силу нравственную, есть еще люди, восхваляемые, возвеличиваемые, вознаграждаемые в еще гораздо больших размерах, чем герои силы и добра, за то только, что они хорошо поют, сочиняют стихи, танцуют. Они видят, что певцы, сочинители, живописцы, танцовщицы наживают миллионы, что им оказывают почести больше, чем святым, и люди народа и дети приходят в недоумение.

Когда вышли 50 лет после смерти Пушкина и одновременно распространились в народе его дешевые сочинения и ему поставили в Москве памятник, я получил больше десяти писем от разных крестьян с вопросами о том, почему так возвеличили Пушкина? На днях еще заходил ко мне из Саратова грамотный мещанин, очевидно сошедший с ума на этом вопросе и идущий в Москву для того, чтобы обличать духовенство за то, что оно содействовало постановке «монамента» господину Пушкину.

В самом деле, надо только представить себе положение такого человека из народа, когда он по доходящим до него газетам и слухам узнает, что в России духовенство, начальство, все лучшие люди России с торжеством открывают памятник великому человеку, благодетелю, славе России — Пушкину, про которого он до сих пор ничего не слышал. Со всех сторон он читает или слышит об этом и полагает, что если воздаются такие почести человеку, то вероятно человек этот сделал что-нибудь необыкновенное, или сильное, или доброе. Он старается узнать, кто был Пушкин, и узнав, что Пушкин не был богатырь или полководец, но был частный человек и писатель, он делает заключение о том, что Пушкин должен был быть святой человек и учитель добра, и

торопится прочесть или услышать его жизнь и сочинения. Но каково же должно быть его недоумение, когда он узнает, что Пушкин был человек больше чем легких нравов, что умер он на дуэли, т. е. при покушении на убийство другого человека, что вся заслуга его только в том, что он писал стихи о любви, часто очень неприличные.] (Там же. СС.112-114.)

(日本語訳)

われわれの社会の間違った理論のために墮落したりしていない人たちは、はたらいている民衆や子供には、どういふところで人を尊敬したり褒めたりするものだからはつきりわかっている。人々が褒め上げて偉いと言う元になるものは、民衆や子供の考によると、ヘラクレスや英雄や征服者の場合のようにただ体の力だけのこともあるし、美人の妃も王の位も投げ出して衆生を濟度しようとした釈迦牟尼や、[[人類のために(新版ニナシ)]<自分の説く真理のために(新版 英訳ニモアリ)>十字架に上がったキリストや、すべての殉教者や聖者の場合のように倫理的な精神の力のこともある。これは両方とも、民衆にも子供にもわかる。体力の方はむりに尊敬させるから、尊敬しないわけに行かないし、善の倫理的な力の方へは、墮落していない人ならば、その精神的な人格全体が引きつけるから、これを尊敬しずにはいられないということがわかる。そうしてこういう人たちは、つまり子供や民衆には、体力や倫理的な力のために褒められ尊敬されて報酬を受けている人たちのほかに尚、ただ歌ったり詩を作ったり踊ったりするのがうまいというだけが取柄で、力の英雄や善の英雄よりももっとも褒められて偉いと言われて報酬を受けている人たちもいるということが一遍に知れる。声楽家や作家や画家や舞踏家が何百万という金を取って、聖者よりも尊敬を受けているということを見て、民衆や子供はまごついてしまう。

プーシキンが死んでから五十年経って、その安い本が一時に民衆の間に弘まって、モスクヴァに記念像が立てられた時、私はいろいろな農民から、何故人がこんなにプーシキンを褒め上げるのかと訊いて来る手紙を十あまりも受取った。ついこの間もサラトフの人で読み書きのできる男が訪ねて来たが、見たところ、この問題のために気が変になっていて、何でもモスクヴァまで出掛けて、プーシキン氏の『モナメント』[「モヌメント」記念像の訛]を立てるに力を入れたという廉で宗教家を取っちめるのだといきまっていた。

実際、こういう民衆の一人が手許に届く新聞や噂によって、ロシヤでは宗教家や役人や偉い人たちがお祭騒ぎをして、ロシヤの偉人で恩人で名誉と言われる、そのくせ今まで一向に聞いたこともないプーシキンという人に、記念像を立てるということを知った時の様子を、ちょっと想像して見さえすればいい。どっちを向いてもその事ばかり読まされ聞かされるものだから、それほど名誉が与えられるとすると、その人は定めし、何か並々でない事か、力強い事か、いい事をしたに違いないと考えてしまう。そこで一体プーシキンとはどんな人だか何とかして知ろうとする。けれども、プーシキンは英雄でも將軍でもなくて、ただの人だ作家だと知れば、

プーシキンはきっと徳の高い人で善を教えるものに相違ないと思い込んで、大急ぎでその伝記なり著作なりを読むか聞くかする。ところが、プーシキンは軽薄といっても言い足りないような性格の人だったこと、決闘でつまり他の人を殺そうとして死んだこと、その取柄はただ愛の詩、しかも大抵はひどくいかがわしい詩を書いただけだということを知れば、その人の当惑はどうだろう。] (同書、221-223頁)

なお、本調査報告の執筆にあたっては、『戦争と平和』の仏訳者のロシア女性について、モスクワ在住のトルストイ研究家の佐藤雄亮氏に、西欧におけるロシア文学の翻訳史について、比較文学者の初内裕子氏に、それぞれ貴重な情報提供をいただいた。記してお礼申し上げます。